



婦人子も

つれづれ會

第十六卷
第十號

本 號 目 次

子供に選る.....	久留島武彦
婦人教育者.....	宮田修
學校教育の基礎としての幼児教育.....	野田義夫
幼稚園參觀記.....	
フレイベルの思想.....	紹介子
奮のいろく.....	京子
雜錄.....	

本誌定價

一冊 郵税共金拾參錢 六冊前金郵税共七拾貳錢
拾二冊同金壹圓四拾四錢 郵券代用 一割増

購讀申込

本誌購讀御希望の方は右定價表により振替貯金にて御拂ひ込み下さい。直に送本致します。(振替口座東京一七二六六番)

本會宛御用務

本會宛諸般の御用務は左の如く願ひます

庶務及會計に關する御用務は東京女子高等師範學校附屬幼稚園内フレイベル會事務所宛
本誌編輯の御用務(寄稿、廣告等)は東京府下代々木山谷一二四倉橋惣三宛

大正五年十月五日印刷納本
大正五年十月五日發行

編輯兼發行者 倉橋惣三
東京府豐多摩郡代々幡村大字代々木山谷一二四

印刷者 守岡功
東京市本所區番場町四番地

印刷所 凸版印刷株式會社本所分工場
東京市本所區番場町四番地

發行所 フレイベル會
東京女子高等師範學校附屬幼稚園内

フレールベル會總會

本年度本會總會左の通り開催致候間多數諸君の御出席を希望致候

一、十月二十九日午後一時より

一、東京女子高等師範學校附屬幼稚園にて

一、順序

一、開會

二、會長の挨拶

三、會務報告

四、講演

○滿鮮幼兒教育視察談

○現代に於ける日本畫の潮流

五、茶菓懇談

六、閉會

文學士 倉橋惣三君

文學士 澤村專太郎君

十月

フレールベル會

學習院教官 小松耕輔先生
 東京府立第一 梁田 貞先生
 中學校教諭

東京女子音樂 葛原 滋先生共著
 學校講師

大正少年唱歌

菊判全拾冊
 裝幀優美
 第一、二、三冊
 各定價拾參錢
 第四集以下
 各定價拾五錢
 郵稅各三冊迄
 郵稅金四錢

うたへ！
 うたへ！

本集は幼稚園と小學校初學年級兒童との爲に特に三先生が理論と實際から研究せられて苦心に苦心を重ねて創作せられたものであります。
 丁度一ケ年で第五集まで出來ましたが各集とも非常な好評と歓迎とを受け全國の所此天樂を兒童キングダムの福音として歌はない所がありません。
 今や新刊第六集を出し續いて第七集準備中でありまます左に目次を掲げました。

次目集六第刊新

一九八七六五四三二一
 竹夏浦夕と向七にお水
 島 ん日面
 太
 馬休郎立ぼ葵鳥じ猿車

次目集各刊既

第一集
 一九八七六五四三二一
 かおおおヒ私蝶飛さ幼
 く庭のア先のと行く稚
 れん人草花の春風機ら園
 ぼ馬形花の生風機ら園

第二集
 一九八七六五四三二一
 せお プ小シ汽藤ほ噴
 ラ さヤヤのた
 ナヘンボン の
 み船コ鯉る玉車花る水

第三集
 一九八七六五四三二一
 木落腰運林蓄天飛蟲お
 舟泥 動會音長行の月
 舟葉掛朝檣機節船る様

第四集
 一九八七六五四三二一
 犬積活鷄 ス紀雪梅双一
 と 動寫 ト元 に遊六月
 猫木真鷄ヅ節 鶯 び日

第五集
 一九八七六五四三二一
 鬼お燕 難おお 葦た野御
 が玉じか たべんと ぼたん遊遊門
 鳥 けりむり子う山 び

店書黒目 目丁二町馬傳南區橋京市京東 所行發
 番九〇八二第(京東)座口替振

婦人と子ども

大正五年十月五日
第十六卷 第十號

子供に還る

早蕨幼稚園長 久留島 武彦

▲夫は小をかねるの諺が、近頃は小は大の始りと代つて、すべての發足點が子供の上に置かれる事となつたのは、誠に愉快な事實であります。

▲いろいろな子供の仕事に關係して居りますと、近來はまた著しく右の事實が認められます、昨日も斯道會の田邊氏が見へて、今回全國の天理教々會所でも毎日曜日には教會所を子供のために開放して其の安全な遊戯所たらしめたい、夫に付ては子供の扱ひ方、設備等に關する心付きを話して貰いたいと云ふ事であつた。

▲また斯云ふ事實もある、先年から農商務省の保

護金を受けて國產獎勵會と云ふものが出來て居る、これは其の名の如く國產品の増加、使用の獎勵で一面には製造家に一面には需用者に對す獎勵運動を任として居るのだが此の獎勵會が八月から何を始めたかと申すと「小學兒童」と云ふ雜誌の發刊であります。その事に就て主幹の杉氏と云ふが來訪されての事に、今日の事到底根底を子供と云ふ者の上に置かぬと永續の生命をもたぬ。

▲子供の時に入れた魂ほど抜け難いものは無く子供の時に据へられた礎ほど根強いものは無いと云ふところから、今回會の方でも子供に向つて先づ

國産獎勵の精神を吹込む計畫を立てたのだと云ふお話であつた。

▲淨土宗が四五年前宗敎務規定で自今以後寺院は毎日曜日子供の爲に本堂を開放して日曜學校を開設せよと云つたやうな事になつたが昨年からは亦西本願寺が門末寺院に對し毎日曜日子供の爲に計る事を布達し、現に今年の夏は京都で特に其目的の爲に講習會迄開かれたのでありました。

▲逝く人を送り迷へる者を化導する寺院までか先づ來らんとする者を迎へて其の第一歩より迷はざるやう訓導せんと計畫するやうになつた事は理詰より押詰めれば當然の考であります、在來の世間相より觀れば驚くべき變化と申さねばなりません。

▲避暑地の盛衰、海水浴場の繁閑までが子供の進退によりて定められるやうになつて來た傾向を考へて見ますと社會は強き者から弱き者に、大きい者から小さい者に漸く着眼の基礎を變て來た事が

著しく認められるやうになりました。

▲社會は確に子供に立還りつゝあるものであります二十世紀は子供の世界と云つたエレン、ケー女史の豫言の通りに宗敎も、工藝も、軍事も、演劇も、子供に基礎を置く事を競つて居ります世の中に尤も先づ認むべき繪畫とことに音楽が一向まだ眼の覺めぬのは如何云ふものでありませうか。

▲職に保育の道にあるお互は今日程自重自奮せなければならぬ、秋はありますまい、諸嬢は子供部屋の設備に就て相談をお受けになつた事はありませんか、子供の玩具繪本なり撰擇について意見を求められた事はありますか、子供の取扱ひ方に就て指導を求められた事はありますか、而て是に就て日日何の位の準備をなして居られますか

▲兩手を背後に組んで立つて居るやうな心掛けでは社會が覺醒するだけだけお互は落伍する者と考へねばなりません、社會が子供に還へるより先づ吾が保育界が子供に還へるべき必要はありますまいか御一考を煩はす。

婦人教育者

成女高等女學校長 宮 田 修

婦人に同情を有する識者及び國家經濟の將來を慮る學者の二方面に於て、各自、相異なる立場からではあるが、將來出来るだけ婦人の教育者を養成し、少くとも普通教育だけは是等婦人の手に委ねたいといふ希望の存することは、諸種の事實から推知するに難くはないのである。

けれども、目下のところ、事實に於ては、なるべく。

△婦人の教育者

の數を減らし▽

男子の教育者を一人でも多くしやうとして居るやうである。就中東京市内の小學校に就てみるに、その統計の示すところに據ると、又各校長の意見に徴してみると、經濟の餘裕さへあれば女教員を排して男教員を増やしやうとして居るのが目下の

状態であるらしい。してみると今日婦人の教育者は經濟の不足から止むなく用ゐられて居るのであつて、教員として價値があるから用ゐられて居るのでないことは明かである。これは國家經濟に考を持つ人の問題でもあるし、又婦人に同情ある識者の苦痛とする所でもあるが、目下教職に従事して居る婦人、及び將來之に心を寄せて居る婦人に取つては、直接頭上に振り掛つて來る重大問題と言はなければならぬ。

我々も亦、經濟上の見地から、將又婦人自身に適した仕事といふ點から、一般に婦人の位置を高めて行きたいといふ根據の下に、今日よりも明日、今年よりも明年と、漸々日子を経過するに従つて、普通教育の大半はこれを婦人の手に委ねるやうにしたいといふ考を懷いて居るのである。であるか

ら我々は婦人の教育者の現状を見る毎に、各校長の意見を聞く毎に、

△遺憾を覺える

事非常である▽

吾人は如上の事實に對して遺憾を感ずると共にその源を少しく考察してみやうと思ふのである。

婦人は何故教職に不適當であるか？

何故婦人に位置を與へないことにするのか？

女教員の數が日に月に尠くなつて行く理由、校長若しくは學校當事者の懷いて居る意見を測度してみるに、其處には必ずしも異性を排して、同性の位置を堅固にしやうといふ如き偏頗な、排他的の考が存在して居るのではないことを承認しなければならぬのである。

婦人教育者の非難せらるゝ第一の理由は、婦人教育者は概して男子教育者と違つて、自信力に乏しいといふことであるらしい、即ち教職に従事して、生徒を教授、訓化してゆく上に、自己を恃む

念慮は、之を男子の教育者には多く見ることが出来るが、婦人の教育者には夫程のしつかりした自信力を持つ者が尠いといふのが一般校長の意見である、本來人の師となるべき者は尠くともそのあづかつた

△生徒に對して

絶對の感化力▽

を有するといふ自信を持たなければならぬ、自分の一言一行が生徒の上に現れてゆくもの、又現せなければならぬものといふ緊固な自負心がなければならぬ筈である。若し自分は到底人の師たるに堪えない、又は人を教ふるだけの力量を備へて居ないと自覺して居るならば、その人は、多少教授法が巧みであらうとも、又その様子が品がよからうとも、決して教師としての資格を備へて居るものとは言へない筈である。曲りなりにも我は教師なりといふ自覺を持たなければ到底人の子を薰陶して行ける筈のものではない。然るに婦人の教

育者なるものに果してそれだけの自負心があるか
何うか、甚だ疑しい態度なり、事實なりを認める
ことが多いと思ふ。蓋しこれは従來の婦人が兎角
自負心を虐げられて、

△自己に對する

的確な觀念を▽

抑へられて居つた長い間の遺傳があるわけだから
自から男子同様な考のもとに世の中に立つことは
六ヶ敷いかも知れない、しかし苟くも事に當つて
その責任を盡さなければならぬ立場にあるものは
進んで自己に對する眞の敬畏の下に、その職責を
盡さねばならぬのは言ふまでもないことである。
それには苟くも自分のあづかつて居る仕事はどこ
までも貫いて、これを全うする程の覺悟と努力と
がなければならぬ。が多くの婦人の教育者が教
育界に重きを置かれぬのは、さういふ自信力が
薄いからではなからうか。どこまでもその職責を
全うするといふ緊固な意志を缺いて居るからでは

なからうか。小なる自己にのみ執着することを知
つて眞の自己を發揮する場合には自分は女である
斯くの如き困難には堪えないと自ら逃げて了ふの
ではあるまいか。大事なことを主張する場合に相
手が男子であらうが、校長であらうがそんなこと
に頓着なく

△飽くまで所信

を披瀝しやう▽

といふ熱心が足りないからではあるまいか。兎に
角従來の多くの婦人教育者にはその志を奪ふこと
の出来ないといふ程の大決心を持つたものが尠か
つたといふのが兎角排除される一の原因であるら
しい。

次ぎには教職に従事する者は常に時代の變遷に
注目し、周圍の事情に適應した新工夫を要する筈
である。過去に於ては金科玉條とすべきことであ
つても、時と場所との關係から全然これを翻さな
ければならぬ場合もあらうし又は或部分を改めて

新しい要求を入れなければならぬ場合もあらうと思ふ、就中日々教へて居る授業上のことに就て言へばその方法は常に新でなくてはならない、従つてその新なる方法を考へつゝあると同時に、その方法を考へる頭腦を作りつゝ進まなければならぬ筈である。ところで婦人の教育者の多くは一向その意味に於ての研究心を持つて居ないといふのが

△排斥の第二の

理由になつて▽

居るらしい。早い話が學校を參觀してみると男教員によつて工夫されたといふものは何處の學校へ行つても多少あるが女教員によつて工夫されたといふものに逢着することは實に稀である。又女教員に會つてその方法を聞いてみると、中には細かく穿鑿してゐて、その熱心に驚かされるといふやうなものはないが、大部分の女教員は面倒臭ければ棄て、顧みない、いよゝゝ困れば同僚に聞くばかりである。自分で字引を引いて苦心して

讀まない、方法を考へない、若しくは實際に従事しない、斯様に職務に對する努力は勿論のこと、自分の頭腦を開拓するなどといふことは殆んど皆無である、故に學校卒業當時には相當に新しい思想を懷いてゐて將來を囑せられてゐたものも絶え間なく移り行く時代の進歩には遂に遅らさるゝことゝなるのである。これでは

△成程教師とし

て値打がない▽

否値打がないばかりでなく、在つて益なく寧ろ害を爲す場合も尠くないことゝなるのである。

第三には婦人教育者は無精でいけないといふ非難がある。子供の世話をするには多少の勞力を要するのであるが婦人の教育者は妙に上品振るのか自から手を下すことを敢てしない、直ぐ小使を呼ぶとか男教員に頼むとかして、骨の折れる仕事には一向手出しをしないのである。又掃除などをする場合にも教師自身が先へ立つて身體を動かすや

うにすれば生徒もよろこんで行ふのであるが、婦人の教育家は斯る場合には遠くから傍觀して居るやうである。この非難も或點までは確に當つて居ると思ふ。しかしこの點に關しても現在の女教員のみを攻撃するのは些か酷に失する、即ちこれは從來の婦人の悪い習慣、就中中流以上の婦人の、重いものは著より他に持つたことではないなぞといふ

△間違つた上

品振りに其▽

起源を發して居るからである、しかし斯る時代は既に永久に過ぎ去つて了つたのである。勤勞主義が男女を通じて時代の要求である今日、自分自身としては勿論、子供を教養する上に於て先づ範を示さざるべからざる教師が舊式な考から無精を極め込むなどといふことは確かに實社會に起つて仕事をする價值を缺いて居るものと看做さなければならぬ。

第四には婦人教育者は男子教育者に比して、子

供に同化しやうとする努力が足りないといふ非難がある。是等も事實あることのやうに考へられる、試みに幼稚園の子供を捉へて、その先生に對する感じを話させてみると彼等は小學校の子供と違つて、その教師を批評する頭腦はないが、その答へる言葉の中に男女兩教師の差異をよく言ひ現すのである、幼稚園の子供は女の先生のことをやさしくて親切であるとはいふが、おもしろくていゝといつて懐いて行くのは男の先生に對してである。これを以てみても女はやさしみと親切とに於て優つて居るやうであるが、

△子供と一緒に

遊びその元氣▽

を鼓舞して行くことをせぬから斯る批評を受けるのである。現に我々が參觀しても、男子の教師は參觀人の有無に拘らず、お伽話を話して居る時でも、運動場に出て遊んで居る時でも、全く子供に同化して、身長の高い子供が多くの子供の中に混

つていも居るかの如くに大人といふ自己を棄て、子供と一緒にたつて居るのを見受けるのであるが、婦人教育者は平素は何うか分らぬが、尠くも我々の參觀する日には、遠くから見たところでは、成程子供と遊んで居るやうには見えるが無邪氣な子供になりきつて遊んでゐないのである。勿論子供と同化して了ふといふことばかりが、いゝのではないが子供の元氣を鼓舞させやうとする場合には先生と生徒とは違ふと言つたやうな區劃を設けては誘導することは出来ないのである、間違つた參觀者があの有様は何うだといふ位にまで子供らしくならなければ子供の元氣を發揚して、その中から引き出して來る力を掴むことは出来ない。この點で婦人教育者は男子のそれに比して小さな自分といふものを庇護ふことに用意はあつてもその職務を全うするといふ

△大きな自分を

缺いて居る點▽

が尠くないと思ふ。

以上の諸點から考へてみれば成程現在の多くの女教師は男教員に比して劣ることが尠くない、これでは幾多の學校當事者が經濟の許す限り男教員を増やし、女教員を排するといふ意見を懐くのも無理がないわけである。しかしこのまゝで通して行くといふことは婦人自身の上から言つても、國家經濟の將來から言つても、極めて憾みとすべきことであらうと思ふ、婦人は生れ付き、以上の如き缺點を改めることが出来ないものであらうかといふにさうではない。といふのは亞米利加邊の狀態に考へても分ることであつて彼の國の教師の大半は婦人であり、又それ等婦人の施す教育が功果的であるのを見ても女子なるが故に出来ないのではなく、我國に於ては未だ古い退嬰的思想が婦人の中に潜んで居るために現在の狀態を起して居ること、思ふ、願はくば女子教育者の多くが發奮努力して速かにこの事情を打破し生きた教育家として實社會より迎へられんことを望む次第である。(文責在記者)

學校教育の基礎としての幼児教育

奈良女子高等
師範學校教授

野田 義夫

左の一篇は「京阪神三市聯合保育會雜誌」第三十七號より披
萃せるものなり。本會は茲に野田義夫氏及び京阪神聯合
保育會に深厚なる謝意を表す。

私は、今日三市聯合保育大會に於て何かお話を
して呉れと副會長から御話がありました但其際私
は保育の事に就いては無經驗で、且之れに關する
智識を持たないからと、再三お斷り致しましたが
是非何かとのお話で、兎に角お受いたしましたけ
れ共、とても皆様を満足さす様な話は出来ません、
誠に辱かしい事でありませう。で直接保育の話は出
來ませんが私は今の學校で教育學を受持つて居ま
から其の立場からお話することゝ致しませう。此
の話が保育上何等かの御参考になれば此上もない
満足であります。從來幼稚園に就ては色々の考が
あります。幼稚園に従事する人は保育は價值ある

もので將來學校教育をなす上に最も効果があるも
のであると云はれますが又保育は、さまで價值あ
るものではないなどと考へる人もあります。

殊に歐洲各國の幼稚園は云ふに及ばず、フレ
ベルの本國なる獨逸にても、左程此保育は重んぜ
られて居りまん。尤も有志者があつて極力之れに
務めて居るのでありますが、反つてアメリカ方面
が發達して居ります。此様でありますから、幼稚
園なるものは、其の人々國々に依つて、各見地を
異にして居ます。尤も此保育なるものは其の仕方
によつては非常に必要であり、又國家に重大なる
關係を有するものであります。で私はかう云ふこ
とを私の立場から述べて見たいと存じます。

今日は云ふまでもなく、學校旺盛時代でありま
す。學校は最も大切なる智識技能を發達させる所

であります。即ち算術、理科等の智識、唱體裁等の技能に至る迄、すべて學校教育であります。其他道德方面、身體方面に於ても、學校が大部分この養成に務めて居ますけれ共、之れを遡つて考へれば學校は人類の歴史によりて出來たもので、學校のない前は云ふ迄もなく家庭に於て父母が之れを施して居たものであります。故に父母は自然の教育者であります。かう云ふ風に學校教育は元來家庭でなすべきものでありまして、學校は家庭の特別機關であります。

今日大部分の保育は幼稚園に於て爲されてゐますが前云つた様に教育は本來家庭の仕事でありますから、教育の任にあたるものは父母の精神を以て居りませんと其の仕事の目的を徹底させることが出來ません。幼稚園に於ては尙更で保母は母の任務を代理するものであります。私は此の考を少し許り話して見たいと思ひます。

此の點を明にするには幼児（入園前）の家庭に於

ける平生の様子に注意し、父母はそれに對して如何なる任務を有するかと云ふことを知らねばなりません。學校教育は大切だけれ共、其前に家庭に於て受ける教育は學校に於て受ける教育と大なる關係を有するものであることを忘れてはなりません。

從來幼稚園でしてゐる仕事は何でもない様に考へられてゐますが、家庭でする仕事又は幼稚園でする仕事は學校教育の基礎となるべきもので、最も重大なる仕事であります。

幼児期に於て養はれる色々のことで最も大切なのは徳性の涵養、即ち道德の基礎が此の間に養はれると云ふことであります。勿論此時期には道德の何たるかを解しませぬが將來道德の基として必要であります。無論之れが養はれて居なければ學校教育は出來ないのであります。

私は殊に國民道德の上より常に此事を考へて居ます。私の考を簡單に云へばツマリ日本では古よ

り忠孝の徳を喧しく云つてゐます。道德の基礎として大切なる此の徳は家庭に於て父子間に自然に生ずるものと私は兼ねてから信じて居ます。人間の道德は種々ありますが其の歸着點は人道一つに違はない。而して最初現れて來るのは父子の間であつて此の時に現はれて來るのが最も偽のない人間道德の根本であります。昔から宗教で人間の最も高尚なる道德が父子の間に行はるゝと言つて居ることは、キリストを父と呼ぶことに依つても知れます、又誰にもよくわかる天理教の親様と云ふのも同じであります。で父子間に現はれたる自然の情は偽のない真心で頑是のない子供と雖も自然この愛を感得します。諸君は鳩翁童話に出て居る道樂息の話をお讀みなされたであらう。私も之れを讀んでさもあらうと感じたのであります。詳しくは記憶して居ないが大體次の如くであつたと思ひます。

或一家に非常に道樂な息があつた。一日親類縁

者の者が寄て、彼を勘當せんことを両親にすゝめた。若し之れに不同意して印を押さなければ親類は絶交すると迄迫つた。息は一策を案んじつゝ、外にて立聞きして居た。暫くして父は母に印形を取り來れと命じた。此の時其の母は涙を流して自分は子の爲めならば乞食になつても構はぬ印はどうしても押さぬとて聞かなかつた。今迄外に立聞をして居た息は此の母の語をき、其の無限の情に深く感じ涙を流して是迄の不心得を謝し、遂に眞人間になつたと云ふことであります。

モ一つは私の親しい家の話ですが、其の家の男子が高等學校の入學試験に不幸落第した。其の翌年又々試験を受くべく準備した、家内一同は大いに心配した、殊に其の母親は案じ、丁度試験の近づく頃長い手紙を書いて其の子を私の家に預け様とした。其の時子供は其の手紙を見せて呉れと云つた、そして其の手紙を讀んで思はず泣いた。之程母が自分の事を思ふて呉れて居るならば自分は

此後家で出来るだけ一心に勉強しやうと其後専心勵んだため遂に入學することが出来ました。之等はいづれも母親の子に對する愛情の深さを示すお話であります。又母親は自分の命を屠して育養するもので、出産の場合子を殺せば母親は助かるが子を助くれば母親は死ぬと云ふ時、多く其の子を殺して母親を助けるのですが、之れを一方母の情より考ふれば自分を殺して子を助けたいと云ふのが自然の情であります。其の實例として一婦人が田舎の祭に行かうと思ふて五歳の子供を負て鐵橋を渡つて居た。此の時轟然汽車が來かゝつた。既に道を避くべき餘時がない。將に軋き殺されんとする際、母親は急に其の子を線路外になげ出した。之れがため子供の一命は助かつたが母は無慘にも微塵になつて川中に落ちた。其後其子が二十歳位になつた時、直接に其時の感想を告げました。其男の話に五歳位であつたが、唯一つ記憶に残つて居るのは母の手の指がレーンルの上にずらりと列

んで居たことである、で今でも汽笛の音を聞くとき身の毛が寄立程に思ふと話しました。

これは前云ふた通り偽のない真心、無限の情があるために起つた出來事であります。

子は母の愛に監督されて育つて行くもので、ルツソンの言に「母は學問も教育法も知らない人であるが子に對する愛及び熱誠を有して居る、即ち母は自然の教育者である」と

この様にして母の誠の精神、無限の愛は遂に子に感移し、子は母を慕ふ、かうして母に對する孝の心は自然に養はるのであります。

日本では孝が本となり、之れが廣がつて忠となるのであります。眞の孝は母に依つて、云ひ代へれば家庭によつて起るので、誠に重大な事であります。

以上は一般家庭に就いて云ひましたが、保育に就て云へば幼稚園は家庭にて爲すことをするのですから、保姆の任務は重大で、保姆がよく母親の

任務に代つて盡したならば幼児は忠孝の何たるを知らないけれ共いつか此の精神を感受し得るのであります。かくして始めて諸君は國家に對し、自己の任務を盡したと云へませう。日本は忠孝の大切なる國であるが、それは君父に對する狭い道徳である、之を廣くしたら如何と云ふ人があります。

私のは舊式の考か知りませんが、「孝は百行の本」と云ふことが最も良しい。孝は母の誠の精神の現はれたもので、之れが最も人間の高尚なる道徳で、誰にも憚からず何人に對してもやましい所がありません。この心を押廣げて行けば良いのであります。御勅語中にも之れを古今に通じて謬らず、之れを中外に施して悖らず云々と仰せられて居ります。

親が子に對して現はす精神を、他人に對して現はしたならば、之れが最も高尚なる道徳であります。四海同胞は其の心を歐洲人に迄廣く現はした時の語であります。即ち骨肉間の道徳を押廣めた

意であります、そして人道の根本は家庭にて養はれるもので、この精神が満足に行けば何にも云ふことはないのであります。

幼稚園に於ける保育の關係も同一のもので、保育の任にあたる人は母親と同様の心を以てすれば其子は國家に對して其の効最大であります。今迄のは家庭の徳育に就ての話でありましたが、智識技能の方から云へば、他日世間に立ちて必要なことは學校で學ぶ物が最も大であります。幼稚園で學ぶことは少く又直ちに役に立つ學問も少くあります、唯後の基礎となるのであります。實に幼児期は遊戯時代であつて、遊技は幼児の生命であります。遊戯の價値は今更私が云はなくても、フレーベル氏が云はれたから諸君はよく知つて居るでせう。但しフレーベル氏の解方は今日とは多少異つて居ます、今日ではグロース氏の著された本の中から多く取つて居ます。

元來遊戯は何の役にも立たない様に考へられま

すが之れに依つて幼児は身を發達せしむると共に
智識技藝の基礎を作るのであります。

遊戯は自由の活動(束縛のない自由)快感の伴つた遊びで之れが身體の發達と共に智技の發達となるのであります。故に遊戯は人間發達上に是非なければならぬ物でありまして、之れが結局將來の仕事と同じものとなるものであります。五六歳の遊戯は何をするかわからないけれど身體の發達を促すものである。大人の遊戯について云へば幼児時代とは異ひ規則的努力を要し、練習がいり、之れに伴ふ束縛もある。又遊戯が追々進んで行けば之が業務となるのであります。始めは何でもないが遂に之れが職業となるのでありますから、幼児時代の遊戯は職業に必要なことをして居るのです、今日では勤勞を大切に云つて居ます、之れがなければ人間は生活して行く事は出来ません。勤勞と云へば六ヶ敷ですが、幼児の精出して遊ぶのも勤勞の一つであります、邪念なく興味と熱

心と活動とを以て大人がすれば必ず其事は成功します。大人になれば誰でもいや／＼するから成績が擧らないのである。幼児時代に於てしつかり興味を以て愉快に遊戯することは後其人の勤勞の有様に關係することが大であります。遊戯とは目的なく走るもので、目的あつて走るものは仕事である。そして遊戯に用ふる活動も仕事に對する活動も同じことであります。

幼稚園の遊戯は活動興味が根本であるが、一生を通じて考へれば甚だ大切な事でありませう。なほ云ひたい事もあります以上のことを要點だけ申上げてみますと母親が子に對する慈愛は孝を呼起すものであるから幼稚園保母は母の心を以て保育に従ふと適切な保母となり得るのであります。遊戯は將來仕事の基礎となるもので、熱心に興味を以てすることは後の活動の基を作るものでありますから熱心にさすと云ふことが必要であります。(文責在記者)

幼稚園參觀記

左の一篇は「心理研究」第五十七號に老教頭なる匿名の下に某氏の發表せられた「試験調べ」といふ記事から抜萃したものであります。老教頭氏は一日その高等専門教育を受けつゝある生徒を連れてお茶の水幼稚園を參觀せられ、生徒にその參觀記を作らしめられました、その「參觀記」は試験の答案として檢閲せられ、老教頭氏はこれを「試験調べ」の中に發表せられたのであります。高等教育を受けつゝある婦人が幼稚園なるものを如何に觀察したでありませうか。皆さんはこれによつて十分なる興味を感ぜらるゝであらうことを信じて少し長くはなりますが抜萃轉載することに致しました。

第一部

朝の涼風が水のやうに藤棚にみちてしんとした

廣い園内に白いエブロンをかけた小さい人影が點々と湧き出して居るのを見た時に自分はエビメシウスやボンドラの世界に來たやうな心地がした。眞似ほどの機械體操やブランコのぐるりには男の兒が騒いで居る、じめ／＼した土手の花壇には女の兒が靜かに花を集めて居る、こゝにすでに性の向ふ相違が表はれて居る。小さい影は見る／＼中にふえて、をどる飛びつく、うたふ、さわぐ。これが八時半に時間の鐘が打つとピタリと自分等をはなれて、ひよつ子が餌に走るやうに小さい入口さして見る見る吸ひ込まれてしまふ。

自分等は今日此の小供等を材料として幼稚園を勉強するのである。一行は三組に分かれて、自分の組は二の組を見るべきであつた。導かれて這入るとかなり廣い教室の正面の黒板の上には勢よく

竹の畫が描れてある。片すみには生徒の成績品をならべたガラス戸棚があつてその前にオルガンが置いてある。相つゞく片すみには臺上の大きな花瓶に芍薬の華やかな花が今を盛りと咲いて居る。

部屋の後ろには一間ほどの高さの戸棚が壁に造られてあつて、教室に這入つて来る生徒は各自の提帶品を一々その中に秩序よくしまつて行く教室の兩側に生徒の机は二列に長くならべられてあつて男の兒も女の兒も何等の區別なく入り雜じつて可愛らしい腰かけの上であばれて居る。

折から小供等は爪掃除、エプロンの取り替へをやつてもらつて居る。小供等は正面に腰かけて居る若い先生のぐるりを取りまいて小さい手を擴げて検査をして頂く。許しを得た小供等は、之れ見るとばかりに自分等の方をにらんでかへつて來るが、いけなかつた兒は花臺の引出しからはさみを出して耻かしげに指をひねくつて居る。やがてエプロンを持つて先生の前に來るもの友達同志でか

け合ひをやるもの、一しきりの騒がすむと、いざと一同つれ立つて共同室へ先生に御早うにと出かける。此の集りをこゝでは會集とよんで居る。百餘名の幼兒が三列に半圓をゑがいて「先生お早うご機嫌奈何、皆様お早う御機嫌奈何」とピアノの曲に合はせてあどけなくうたふ。これがすむと二三の表情唱歌を自分等の爲めにとくにうたはせて、再び各自の教室にもどる。

一つの業にとりかゝる時間の始まりに保母がオルガンの眠る様な曲をひくと小供等は一同しんとなる。「小供等のことですからいづれ靜かにして居る事はありませんがせめて二分でも三分でも靜かにして小供の精神を落ち付けさせたいと云ふ希望でやつて居ります」と保母が云はれた。やがて保母が「皆さん今日は切り紙をいたしましたようね」と云はれると、當番にさゝれた子が四人ばかり程立つて机の引出しから人數丈けのはさみに鉛筆、色鉛筆、型紙と畫學紙をとり出して來ていちゝくに

ばつて歩く。小供等のやる事は魚やら家や、たるまなどの形を切り抜いて簡単な彩色をほどこした型紙をてんでに選んで畫學紙の上に於いて鉛筆でその形をうつしてそれを切り抜いてお手本のやうな色を付けるのである。「未だ新しい試みで成功するかせぬか分かりませぬが此の前の成績はあれに」と指される壁の上に、四ツほどの優秀なのがはりつけられてある。小供等は此の型紙をてんでにえらんで白紙の上に於て幼い手元で形を取り始める。見まはして居ると紙を受けとつてはじから使つて行く者、真中からたつた一つを抜くものがある。早くつて大ざつぱなもの、おそくても正確なもの、やり出すや否や「むづかしいや〜」とだゝをこねて机の間をとびまはつて居る兒があるかと思へば人が書き終へて遊びに出てしまつても一人残つて黙々として他をつけて居る兒もある。落ち付いて黙つて居るのもあれば、そは〜と此方ばかり向いてしやべりまはつて居る兒もある。唯

見れば幻の浮き出したやうなもの、束の間に現はるゝ水の泡のやうなもの、強くさはればツと消えてしまふかもしれないぬ。この柔かいこのもろいものを、碎けぬ様に消えぬ様にと心をいためつゝ現實の人の形に造りかためて行くこれが幼稚園の教育かと自分は今まで心にきめて居た、然も此夢のやうな他愛ないものゝ中にすでにさびしい個性の差が閃いて居る、境遇の感化も等しく認められる、カーライルなら泣きもしよう、そも〜之れ等に對しての保育はいかにほどこされてあるか。

「さうでございますかうして居ります中には随分様々な性質の小供がございます。それ等に對して私共の方で特別にどうといふ取り扱ひは致して居りませんが、場合々々によりまして多少の手加減は試みて居ります。泣くに致しましても小供によつて色々な場合がございますので、それに應じてなだめて泣きやませる時もあり強よく出て止める時もあり、すねて泣く兒には大泣きさせて自然に

止まらせたり、いくらなだめても意味もなくなたい
長泣きする者は打ちすておくと云ふ風にいたして
居ります。特別に注意せねばならぬ兒は、始終教師
が見はりをして居りまして晝御飯の後など云ふ時
間をえらんで靜かに話してきかせるやうに致して
居りますが、これが多少の効果を認めて居る譯け
てございます。家庭の感化も随分ございまして中
には折角此方でしたことがその日家にかへつ
て打こはされてしまふと云ふ場合もたまにはござ
います。此の組の生徒は主に商家と學者の家の兒
が多くございますので、先の場合よりも後の家の
風などの差異が小兒の習慣性質に表はれて居る場
合の注意の方が只今は必要に感じて居ります。け
れど、長く茲に居る内には多少習慣性質の差異が同
化されてゐるやうでございます」と。これは保姆が
私の問ひに答へられた言葉であるが、猶進んで小
兒の知識及責任と云ふやうな問題についても次の
如く語りつゞけられた。

「又知識發達の程度も小供によつてそれぞれ違つ
て居ります、此方から豆細工の材料を一樣に渡し
まして或ものはそれを使つて様々な工風を疑ら
して新しい細工を造つて參るものもあれば、い
つまでたつても同じものばかり造つて居るものも
ございます」と保姆は生徒の新しい工風で造
られた水上飛行機の豆細工を示して「又同じ旗を
こしらへるにも始めの中は一本の旗を造りますが
次にはこれが交叉旗となるといふ風で、工風力の
進歩は幼兒觀察上おもしろい現象でございます、
然し學校では決して此の知識の發展に制限を加へ
たり又強制したりはいたしません、個性によつて
その進歩を計つて居る譯でございます、まだ教へ
るといふよりは指導といふのですから、又小供
の責任の感念はよわいものでございますが多少の
きざしは認められます、小供等が共同で使ふもの
を與へてやればその後片づけをしようなどとは一
向思ひませんが、組木とか豆細工とか一人に一つ

渡したものはその小供が必ず後仕末はいたして参ります、自分で使つたものは自分で片付ける責任がある」と云ふ風な感念が起つて参つて居ります、然しまだ共同でやつたことには多少なりとも自分に責任があると云ふことに氣が付くほどまでには進んで居りませぬ」、見れば共同に使つた鉛筆はさみ型紙などはあたりにほをり出したまゝ、人影は消えてしまつて居て、たゞ二三人のおとなしげな女の兒がこれを片付けて居るのを見た。

運動場へ出ると園内はもう小供でうづまつて居る、忽ち先生、といつて飛び付いて來る人なつツこい元氣ものも居る、未だお友達が出來ませんので先生の云はれる何となく臆病さうな陰氣なものも居る主として男兒は男兒、女兒は女兒とつれ立つて居る小さい砂場で男の兒等は土まみれになつてトンネルを造つたり池をほつたりして興して居る、築山の上を追かけまはる群、機械體操にくるまつたいたづらつこ、土俵の上でしこふんで居る。

おん大、プランコよし花壇よし若芽と萌える彼等の元氣、精氣を發生させその發育をおぎなひその智的發作の衝動を與へその美はしい情緒をばぐ、むべく設備は實に完全したものである、此處に彼等は小さい社會を型づくり、その活動の天地をかくしその興味を分かちその利害を争つて居る。

一般に小供は無邪氣で眞面目である、笑ふにも話すにも本氣である、いつはりが無いそして愉快で楽しい實に快樂は兒童に對し適切に生をいとなましめ世の善を知らしめ又善に導く唯一の衝動でがなあらう、又彼等は社交性にもえて居る、これだけの小供が見て居る所喧嘩もせねば泣きもせぬ、そは彼等の社交的精神がその教育によつて圓滿に發達せるによるのであらう。

鐘がなつて小供等は又教室には入つた、はじめに例の如く靜かな樂の音が彼等の飛揚する魂をとめる、次いで先生が黄と青との色紙を出して一枚々々はぐつてその數を生徒に數へさせて後生徒

に一枚づゝくばらせて勝手なものを折つてごらん
なさいといふ、男兒は主にかぶとや蝶を折り女兒
は三寶をこしらへた。

畫食時となると先生はたすぎがけでバケツに水
をくんで机の上をふかれる、と當番の小供がお辨
當をくばつて歩く、御飯の前にお手てを洗ひに
出たわんぱく連がいつまで立つてもかへつて來な
い先生はそれをわざ／＼よびに出かける、お世話
のやける事であらう先生のお顔もくもつて來る、
お目も光つて來る、無理もない、とは云へやつと
食卓についた小供の顔は今日見た一日中での最も
樂しさうに見えた時であつた、食事の様は残念な
がら自分等は見ずに控へ室にかへつた此室は平常
は參考室かと思はれたがこゝに當幼稚園主事をし
て居られる安井先生が見えて自分等のために幼稚
園事業についてお話し下された。

當幼稚園は目下百二十名の幼兒を入園させそれ
を三組に分つて各一人の高等女師卒業の保姆が

一組について居る兒童は三四歳頃の各入園志願者
の中から籤引で四十名だけとつて三年間、丁度小
學校年齢に達するまで保育する、今年は二期期を
とつて見たが効果があまりおもしろくなかつたと
の事である、先生は猶當園の保育法について御説
明があつた後傍にならべてあつたフレーベル恩物
及びそれより案出して目下當園にて使用して居る
新らしい恩物について更に御説明下された、この
新らしい恩物は張り紙、豆細工、組み紙、粘土細
工、畫等である、畫は生徒の自由意志で描いたも
ので試みにその一枚／＼をはぐつて見ると小兒の
單純な知識、心境、興味が自由に發表されてあ
る、描かれた畫は多く彼等の實世界に於ける經驗
である、飛行機が最も多く彼等の知識興味を動か
したと見えて最も多く畫かれてある、次には自然
の現象である、山や野や木や太陽月などが畫かれ
てある軍器は之れに次いで居る、これによつて自
分は小供と周圍の感化といふやうな題目をとらへ

て暫く考へた、食事がすむと園内外は又小供でみだされる、大人の精氣はすでに消しても無限かと驚ろかるゝ小供の元氣は又活動を開始する同じ事を同じ手段で幾度繰り返へさうといつまでたとうとあくといふことを知らぬらしい。

一時が過ぎて暫くすると門内にはもうポツ／＼とお向ひの連中が來て居る、やがて遊び狂るうて居る群を通つて様々な遊具をもつた小供の列が通る、あと片付けをいたして居りますと先生は云はれた。

かうしてすべてが終ると生徒は又元の教室にかへつて朝の如く容儀を整へエプロンを取り替へお辨當をくばつた、「皆様さよなら御機嫌よろしう」とうたふと一同二列にならんでかへて行く廊下の出口に立つて先生も自分等も見送つて居ると小供等はお迎への乳母や小供やおばあさんに手を引かれてかへつて行く、中には車の上に納まりかへて行くものもある、かくて自分等は先きに小供等が

會集に來た室で倉橋氏の幼稚園教育に關する原理を約一時間に渡つて謹聽した。

かくして自分等の學問は終へた、實に幼の精ともなくしき宴けに招かれたやうな感がぼんやりした我心に紅やみどりに印象された。

第二一部

今日一日我等が目に見耳にきゝたる凡ては幼稚園教育即ち保育の全體とその對象とである、人間天賦固有の能力を發達せしむるとは、フレーベルの保育意義であつたが此處の保育はそれと共にいかに彼等の身體發育に資せんかにかに彼等の習慣を善良に導きいかに心情品性を美化させ且つ家庭教育の缺をおぎなはんかに腐心して居る、例へば黒板に竹を畫き教室に花を置き、毎時間前にオルガンを鳴らすなどは彼等の心情と品性を外部より美化させんためではないか、又、會集に集まり皆に摺袂させ容儀を整頓させかつ各後片付けをさせるなどは幼児に美はしき規律の習慣を造らせん爲

めではないか。彼等が智育體育は保育課目に表はれたる遊戯や様々の手技によつて目的を得て居る、そもく、活動は生育しつゝある幼児生活最初の現象であつてその産物であるそして又幼児の活動は彼等の行爲、感覺、思考の存在である、これを完全に表はすものは遊戯である、彼等はこの遊戯中に身體の發育をましその間に知覺動きその知覺は言語によりて明晰となり更に思考を生ずるのである、凡て此等の發達を導かんとするには遊戯の設備が必要である、當園に於ての設備は必ずしも規模大なりと申上ぐる譯にはいかないが目的を貫徹さすべくは、完全せるものと云ひ得やう、身體の發育を助ける爲にはブランコ、土俵場、機械體操などがある、知識の發達をうながすべく砂場、花壇、池、築山更には鳩籠、鶏のこやがあつて、都會の小兒をして自然の一端にふれしめ、動植物の知識を得てフレーベルの所謂自然に對し同胞に對し神明に對する關係を認めしむるのみならず彼

等の同情趣味の範圍をひろげ得る便宜は至れりである、就中此等の中にあつて最も大なる習得は社交性の遺憾なき發達だらうと思ふ。

自己の喜悅満足をほしいまゝにすると同時に自他の靜安彼等が社會の調和をはからんとする思念は彼等の中に動いて居る、次に手技に於て自分が目に見親しく保母よりきゝたる如き彼等が知識の發達工風力の進歩は此處に敢へて贅せぬ、たゞ自分の觀察した限りで、幼稚園教育は一般に自發的である、受働的でない、畫をかくにも豆細工をするにしても、あゝなさいかうなさいと教へては居ない、先づ小供の直覺にうつたへ理會をうながし語らせ行はせ造らせると云ふやり方である、實にや幼児の春先のやうに萌芽する知識を一定の型にはめてのびさせやうとするのは猶その若木の芽をためて木を枯らすに等しいものである、自然のまゝに何等抑制なくのびさせて居るのは、保育の主義に叶つたことであらう。

次にかゝる幼児をあつかひかゝる重大なる保育にたづさはつて居る保母について一言して見よう、云ふ限りでもないがいかに設備が完全したとて保育の方針が當を得たとて保母その人を得ずんば百日の説法に過ぎぬ。

一寸考へてごらんさい、毎日學校に來て自分の組四十いく名の白痴とあまり境域をへだてない他愛ないものを取り扱かふのである、幾日へたとて幾日教へたとて進歩もせねば理想通りになつてもくれぬ、朝から晩まで彼等がパベルの言葉をたどらねばならぬ、子供可愛いと思ふ人にあらずして、この無意味の人型の中に有意味の人間歴史を洞察する人にあらずしてどうして二日と此役がつつかう。

ひるがへつて見れば彼等は世の母よりたくされた萬金にも代へ得ぬダイヤモンドの彫物である、彫りそこなへば永劫に玉を損ふ、もし失しなへばその罪萬死に當る、然して世に向つては神の下し

たる一つの光りを永劫に葬るのである、かゝる至寶なる小兒の前に保母はある時は母であらねばならぬ、ある時は教師でありかつ判断者であらねばならぬ、ある時は守りであらねばならぬ、責任をいとひ理智の發達をはこる女のよくなし得る役であらうか保母は教師の中の至難なるものである。

保母は完全なる經驗知識を有し温情忠實圓滑の諸性を具備する人でなければならぬ、又幼兒の心情を解しそれと同化する資性あり且つ母の精神と熱烈なる婦人の心性を有する婦人でなくてはならぬ、實に女子教育の最高完成は保母に要する訓練なりとは至當といふべきである。(中略)

次に幼稚園と家庭に關する考への一節を以て全文の終りとする。

幼稚園は今より六十年ほどまへに獨逸のフレールによつて建てられてるもので幼稚園の名の如きも彼れが人類の萌芽たる幼兒が恰かも草木が優しき園丁の手にはぐゝまるゝ如く自己上帝及び自

然に一致して教育せらるべしとの意より Kindergarten なる名を附したものである。彼れは宇宙萬物を通して永久不遍の理法をみとめ之をこの教育に應用しようとして恩物などを造つたのであるが爾來星うつりものかはりその哲學的教育法は廢せられたが Kindergarten の名におふ教育の方針は依然として隨喜されて居る幼稚園の存在は倉橋氏の原理に於て伺つた如く、1は公民教育をほどこす爲め2は家庭教育の缺をおぎなふ爲めである。

家にあつては彼等の社交的性情を發達させ満足さすことは充分に出来ない、又その身體發育に資するほどの場所もない又適當な教育もほどこせない、こゝに於て愛兒を家庭は幼稚園にたくするのである、家庭と幼稚園の關係は直接なものである、家庭の印象は保育の上に關係を及ぼすことがはなはだしい折角幼稚園で教へても家庭に於てそれがこはれてしまふことは敢てめづらしくもない事實

である、それでは幼稚園にやる必要はないはずである、とにかく一般に家庭は自家の缺點を知つて幼稚園に出すがそれ以上の注意はほらはない、幼稚園に保育の實際を見にくる母親もない、これでは幼稚園事業の振はないのもことほりではないか。

折角世の母が幼稚園の優秀なる點を知つて愛兒をそこにたくするならなるべく幼稚園教育にも注意をはらつてもらひたい、そして彼等の家庭教育の方針をもそれにしたがふやうにして頂きたい、かくして始めて彼等が愛する兒等を幼稚園に託する意義が判然しひいては幼稚園存在の意義もこゝに貫徹するわけではないか、かくて幼稚園事業は盛んになり人間教育の根本がかたくなり然して社會は完全な教育を受けたる人によつて改善されて行くわけではないか、世の母たる人よ。以上。

フレーベルの思想

フレッツチャーに據る

紹介

▲彼の著作の基調▼

フレーベルの著作全體に渡つて居る基調は幼兒に對する情熱的の愛と高尚な、しかし漠然とした唯心論とであります、而してこの唯心論は絶えず同様に漠然とした萬有神論に入らうとする傾向を有して居るのであります。これがフレーベルの思想を支配し、彼の著作のすべてに基調を與へたのであります。

彼は斯る基調を持つてゐた爲めに、又それが漠然としてゐた爲めに、熱心な幼兒教育者を惹き附けることが出來たのであります。幼年時代といふものは人生の中で最も好ましい時代の一つに屬して居ります、而して幼兒と親しく交ふことは實に

楽しくうれしいことであります。

子供は始終何の屈托もなく、生々としてゐて停滞するところがありません、これは嚴肅な生眞面目な大人には實に羨ましくも思はれる境涯なのであります。若し子供と一緒になつて遊ぶことが出來ないといふやうな人がありましたらばその人は「如何なる犯罪にも適する」程に缺陷のある人であるやうに私達には見えるのであります。

子供と一緒になつて遊んだり、半端な時間を費したりするのはたゞそれだけのことであります。一生の大部分を子供のために犠牲としてその感化教導のために盡し、子供の缺點を矯め、子供の氣隨氣儘に堪え、徐々にこれを善良な習慣に導いて行くといふことは容易な業ではありません。

▲唯心論と人類の愛▼

子供の感化教導の爲めに、一生を犠牲に供するといふことはその一生を狭め、世間に對する智識を限ることになり易いのであります。

取扱ふ兒童が幼ければ幼い程、この傾向は顯著であり、この傾向に反抗することが困難であります。或る人氣のある作家が有名な學校小説の中で一教師の口を借りて「諸君、私達の生活は矮小的生活であります、收縮的生活であります、神様はすべての小學教師をお救ひ下さい、小學教師は神様を求めて居るのであります」と言つて居ります。この危険を認めて居る教師達は何か健全な調理薬を探し出さうとして居るのであります。而して多くの教師達はその調理薬をフレーベルの唯心論と情熱的な人類の愛との中に發見しました。豫言者を刺戟した思想を、その源泉にまで溯つて考へてみるといふことは常に有益なことであり

ます。何故ならば私達は常にこの源泉に於て、その豫言者の教示に表はれて居る思想の力の秘密を發見することが出来るからであります。

フレーベルが何故にその一身を子供のために捧げたかといふことは明瞭簡單に説明されます、それは彼がその子供時代に於て顧慮せられず、理解せられなかつたからであります。彼はその自叙傳の中に次のやうに書いて居ります。

「早くから私は悲痛苛烈な人生の争闘の中に投げ入れられて了つた、而して不自然な生活と不完全な教育とが私の上にその勢力を働かして居たのである。」

放棄せられ、誤解せられて、彼は、子供の強く要求するところの溫き同情といふものに包まれたことがなかつたのであります。彼の母は彼がこの世に生れて九ヶ月経つと亡くなつて了ひました、彼の父は彼をあまり愛さず、早くから子供らしく扱つてやることを止めて了ひました、それから又彼

の繼母は世間一般が繼母といふ名に對して懐く忌はしい想像の實現者であつたのであります。斯る周圍を持つて居る子供は普通ひねくれた厭ふべき性質を持つやうになるものであります。フレーベルの場合に於ては全然別種の結果を取るやうになつたのであります。彼は内省的でもあり、自己解剖に忙しくもありましたから、彼の感じ易い氣質は傷ましきまでに惱んだに相違ありません、又彼は決して子供時代の苦惱を忘れもしませんでした

▲苦悶の熔爐▼

けれども苦悶の熔爐を通つて來た彼の心靈は決していぢけたものとなつてはゐませんでした、否々益々麗しいものとなつてゐたのであります。妙にこぢれたり、皮肉になつたりする代りに、彼は彼自身と彼のすべてとを捧げて他の子供と同じやうな苦い經驗から救ひ出すことに努めました、まことに子供の彼に負ふ所や大なるかな、何故なら

ば彼の苦い經驗とその情熱的な申立とは、子供を單に可愛なもの、若しくは玩具として扱ふのではなく、尙又うるさいのを我慢するのではなく、進んで之を理解し、温き同情を寄せてやらなくてはならぬといふことを知らしめたのであります。而して幸ひなことには現今ではこの子供に對する温き同情といふものが未だ嘗つて見られなかつた位にまで行き渡つて來たのであります。フレーベルはその子供時代から、自らは暗い淋しい道を辿りながら、彼がその生涯を捧げた仕事に不斷にその新勢力を注ぎ來つたのであります。

フレーベルの感じてゐた力の第二の源泉は當時の獨逸の思索家の殆んどすべてが奉じてゐた唯心の論の哲學であります。十八世紀の終頃、獨逸は政治的には實に否運の頂點に在りました、而して獨逸聯邦の夢は殆んど實現せられさうにも見えませんでした、しがし丁度この時に形勢を一變させることが起つて來ました、それは軍人や政治家の方

から起つて來たのではなく、哲學的詩人シラー、詩人的哲學者シエリングの如き詩人や思索家の方から起つて來たのであります。事實の世界からではなく思想界から、氣息奄々たりし獨逸に新生命を吹き込んだところの新しい精神力が出て來て現今世界諸國の認めて居るやうな人類の智的生活に於ける誇らしき地位を獨逸のために贏させたのであります。

▲唯心論の影響▼

その頃獨逸には「獨逸國民に告ぐ」に於てその實際的の唯心論を明示して居るフイヒテや、自然を可見的理性と見、理性を不可見的自然と見て、自然そのものは、自意識として人間に現れて居る理性と同一の理性を現して居るものであると説くシエリングの形而上學的唯心論が行はれて、當代の人心に非常な影響を與へてゐました、殊にこの唯心論がゲーテやシラーに影響して詩的情緒に溫めら

れますと瞬く間に獨逸國內は無論のこと全歐羅巴に擴つて了つたのであります。

フレーベルも確かに是等の思想に影響せられたのであります。彼は別段に哲學を教へられたことはありませんでした、彼の教育は大部分は自習であつたのであります。イエナで費した短い年月とゲツチンゲン及びベルリンに於ける間歇的研究は主に數學と自然科學との爲に捧げられました。

彼は「數學を除く他、理論的の講義を聞いたことはない、哲學に就ては交友の間に於て得た僅かの智識を有するに過ぎない、しかし私はこれによつて多くの刺戟的思想を受つたのである」と言つて居ります。

當時イエナ大學は名聲の極頂に達して居りました、イエナは實に獨逸の思想界の中心であつたのであります。カントの哲學もこゝで非常に歓迎せられました、哲學の講座はその後、引續いてフイヒテ、シエリング、ヘーゲル等に依つて占められ

たのであります。

フレーベルの哲學的幻想——何うもフレーベルのは哲學的思索といふには不適當であります——は哲學體系の研究から來て居るといふよりも自然との交通から來て居るといふ方が當つて居るのであります。彼はその一生を通じて哲學的思索家であつたと言ふよりも哲學的夢想家であつたといふ方が當つて居るのであります。彼の哲學は明確に思考せられた體系ではなくして、心の有様であつたのであります。

▲自然との交通▼

彼の自然との交通は親密でありました、而して一生を通じて渝らないものであります。子供時代にはチューリンゲンの森林地方にある彼の家の美しき周圍が彼の夢みがらな内省的な心の中に入つて行きました。彼は斯う語ります。「自然、私の見ることが出來、理解することの出來る、木の育ち花の咲く世界は早くから私の觀察、反省の對象となりました。」

ノイハウスに於てチューリンゲンの林務官の見習生を勤めてゐた頃には彼はよく一人で靜かな森の中へ入つて行つて時を消して居りました、而して自然を愛し、敬する心は遂に彼に於て抜き難き宗教心となつたのであります。彼は斯う語ります、「私の教會的宗教生活は今や自然界的宗教生活に入りました、而して後半年に於て私は全く植物の中で植物と共に生活しました、植物は堪らなく私を惹き附けたのであります、尤もこの時分には未だ植物界の内部生命に關する智識は少しも私の心の内には啓けてはゐなかつたのでありますが」

斯くの如くフレーベルは生得の傾向に依つて、又子供時代の周圍に依つて、當時行はれてゐた唯心論的概念を悦んで迎へ取るやうに運命づけられてゐたのであります、而してこの概念から出發して無限といふもの、考察に際しては半神祕的の惠念に入つて了つたのであります。彼の著作の多くが容易く漠然とした概括性に赴いて了ふのも彼の唯心論的の傾向が然らしむるのであるとも見られるのであります。

蕾のいろく

京子

一、かくれんば

萩の植込込みのかげにかくれて、大きな先生のからだをかこんで、にこく、クスく、しやがんだ子供は皆笑ひ顔をしてゐる。小さいからだを一層ちいめて、りんごのやうな道ちやんの頬がつや／＼光つてゐる。それがうつつたわけでもあるまいがいつもあほいみどりさんが今日はさえくしてみえる。

と。そばの丸花壇に蝶々を見てゐたてる子さん。とき色の半そでの洋服に簡単な白いエブロンをかけて、かぶきりの少しのびたのを二つに分けて、白いリボンで結んで——何げなしに後をむき、皆のかくれてゐるのを見て、あごが二重になる位首

をまげながら、

にこくして、「先生チヂチイわたくしがかくしてあげませう」

まつしろな靴下の可愛い足を少しひらいて（朝の深呼吸の時にするやうに）両手をのばして、しやがんでゐる。先生と同じ位な丈をのばし、時々うしろをふりむきながら一生懸命で御衛をして下さつた。バタ／＼とおにの足音に、皆一度に先生の胸や袖の下に小さい頭をひそめた。と番をしてゐるてる子さん、大きな聲で、

「一郎さんこゝではありませんよ」

フム……とまた首をまげて笑つて。……

さとい一郎さん少し背のびをして。

「あ、てる子さんのうしろに先生が、五郎さんが

道ちゃんが」と

「あゝらみつかつた」とてる子さんはのぼした兩手をおろしてお鼻にしはをよせて笑ひながら。

「先生わたくしも入れてちようだいね」と後にとびついて四人の子がつかまつて一つのこつた先生の右の小指を大いそぎでつかまへた。

二、達ちゃん

色は黒いけれど、頬は羽二重のやうに柔かで、何か云ふときよく先生の顔にこの頬をすりよせるので、先生はたまらなく可愛くなる子がある。しもぶくれで、ちんまりした口もとや可愛いらしいあご。さがすやうな眉毛は左右にはなれて一寸一筆がきにしたやうだ、ひとへまぶちの茶がちな目はいつぱりをしらぬ貴さにかいやいてゐる。頭の毛がちやれてゐる。少し長くしてゐる時などは生えぎわの處がクル／＼とまいて、どうみてもキウビ―かピリケンか。お鼻の具合もよく似てゐる。そ

の鼻がまたおもしろいので、いつやら達ちゃん、何かのはづみにお友達を小さいげんこでコッソ、とした。相憎と氣のよはかつた相手はすぐに泣き出した。「君失敬ね」といつたがだまらない。その時達ちゃんの顔。そばに來た先生を見上げて「先生僕がぶつたら泣いちまつたんです」それだけいふ間に、いつばいになつてゐる目からはポロ／＼と涙がをちる。「ぶつのは達ちゃんがいけませんね」といつてゐると、達ちゃんの鼻から圓い提灯がブツと出て又ひつこんだ。二度ばかりする中に小さい下唇が少し出る、八の字がよる、まるくふとつた腕を顔にあて、破裂してしまつたまで。

當然しかられるべき理由が達ちゃんの方にあつた此の場合、出たり、引込んだりするお提灯のおかしさをこらへるのに先生はすゐぶんな努力をした。「達ちゃんの顔を見ると、自分でも悪かつたと思つて居るから、氣の毒やらおかしいやらで、何もいへなくなるのですもの」と子供達の歸つたあ

とで保母は話してゐる。

達ちやんは割合に遠い道を二つ違ひの兄さんとよく歩いて通つた。ある雨の日、例の通り二人で來た。みると、こまげた（これは少しよごれてもころばぬやうにとの母様の御考案らしい）に小さいから傘、それが丈の低い達ちやんにはやつばし傘のあるくやうにみえる。帯から足まで、後の方をすつかりぬらしてしまつた。兄さんの方はさほどでもないが達ちやんはあんまりしめつてゐるから身體にさわるといけないと着物をぬがせて乾かした。その間そなへつけの赤い長襦袢をきせた、ゆきがながくて、小さい手々がやつと出る位。帯も濕つたので、ネルのお腹まきを代りにしめさせ座ぶとんの上にキチンと座らせた様子はまるで小さい達摩さま。あそびたいのをがまんして、乾くまでぢつとしてゐたのは惻口な達ちやんが「やあ、おかしいな」といふ友達の言葉を豫期してゐたためであつた。友達といふ自分と同等のものゝ言葉

は子供にとつては大そう力のあるものである。達ちやんがまだ入園したての事であつた。ちゝれてゐるせいでか髪の毛を少しのばしてあつた。すると一人の子が、他の友達に、「君、この方女だね、髪が長いもの」と云つた。

それをきいてゐる達ちやん、早速、お家にかへつて「ママちやん、僕を兄さんと同じにして頂戴、僕、女だつていはれるんだもの、もつと短くしてね」とせがんださうだ。

手技の説明の時など、お行儀よくしてといふと口をきつくむすんで、兩手を後にして、胸をつき出して、首をあげてりきむ。達ちやんはまことにすなほな子だ。

三、たき子さん

みどりの地に、とき色の櫻と緋のみぢ、かすみを白い線で出したメリンス友禪がいかにも春らしい。あまり大きくない元祿にした袖口と裾とに

は紅のもえるやうなのがたださへ色白のたき子さんを一層美しく、黒々としたかぶきりがまるで人形のやうだ。それでもたき子さんの細い眉の間には子供に似あはぬ淋しさがある。

入園の時、何かのことで、お父様の事をうかいた時、「はい。この父は……」とおつしやつたぎり、たき子さんの母様はあとを續けることが出来ずにいらした。なせあんなことを伺つたのかと、あとでほんとうにすまなく思つた。あの若くしい、美しい母様は御良人にお別になつて、まだ半年もたはずにいらした。

たき子さんには父様がないのだ。

一日二日はよく遊んだのに、三日あたりから少しはにかみ出した。たき子さんは、今朝も二日月のやうな眉の下をまつ赤にはらして來た。

「たき子さんは姉様だつたのね、誠さんや正さんにまけますよ。さあ、がまんして、良い姉様になりませうね」

勵まさうとする聲を氣にもとめず「なかや、なかや」と女中にしがみついてはなれない。

だまつて様子をみてゐる先生は一寸庭をみて、「あ、たき子さん、あそこに櫻んぼうが落ちてゐますよ。皆さんが拾つていらつしやる、たき子さんも拾ひに行きませう」と云つた。

「櫻んぼう」といふことに引きつけられて、思はずたき子さんは先生の手をひいた。そして名は知らないが昨日も一昨日も一處のお室で遊んだお友達のある庭へ下りた。

土のぞうりと下のおぞうりとをはきかへて居るその間に丈の高い先生は、下では小さいたきちゃんの手をひきながら上の方で、目で「なかや」に何か話していらつしやるのを、たき子さんは少しも氣づかなかつた、先生は安心した。なかやは見えないうやうに急いで玄關の方へ出た。庭に出るとやさしい姉様や兄様達は。

「君、これあげませう」「わたくしのも」

と、まつげに露のあとのあるたき子さんをいたはつて、大さわぎして自分の見つけた櫻んぼうをも持て来て、小さい手にぎらせた。たきちやんの肩の下のはれがだん／＼ひいてさえ／＼した顔になつた時、丁度足元に落ちてゐた、まつ赤な櫻んぼうを自分で「あつた」と云つてひろいあげて、思はず笑顔をみせた。

「まあいゝのだこと。よく見つけましたね」これだけの言葉に現しつくせぬよろこびはこの時の先生の顔にかゝやいてゐた。おそらくこのよろこびは物質や名譽の何ものにも比べられなかつたらう先生、といつても手につかまつてゐる道ちやんが（たきちやんに手がかゝるから、どうしたかしらと思ひながら、すて、置いたら）砂場へ行つて、一人でせつせと砂のおだんごを作つてもつて来た。「まあ、道子さん、大そうおもしろいさうなお團子が出来ましたね。ちや、も一つ、たき子さんにも、こしらへてあげて頂戴な。」

道ちやんは口もとに可愛らしい笑くばをみせてまた砂場にとんで行た。少し元氣の出て来たたき子さんの様子をちつとみてゐた先生はよいものをみつけたやうに云た。

「あの、たき子さんも、道ちやんのお手傳しませう、先生もこしらへますよ、大きいのを」

たきちやんは先生の手につかまつて、だまつてがつてん／＼をして、小足に砂場の方へ行つた。

その内に、あつちからも、こつちからも、お團子の御進物や、御手製のお供へがたくさん出来た。よし子さんの木でくつたお釜を型につかつてこしらへた格好のよい、おまんぢうだつた。このお釜がたき子さんはほしくてたまらないらしかつた。それはどの型をわたしてもわたしても、首をふつた、そして「何がほしいの」ときいたら、だまつてよし子さんの手を指した。

きむづかしい芳子さんの氣象を知つてゐた先生は、どうかと思つたが、まつ芳子さんをよくわか

つた姉様にしてしまつて、

「よし子さんは姉様なのね、この小さい方に一寸お釜をかしてあげて頂戴、ちきお返しますよ」

變り者のよし子さんは口をきかなかつたが、快く肯いてお釜を持てきた。

「よし子さん、どうもありがたうございます」笑ひながら云た先生は心からこのお禮を云つたのだつた。

その中にあつちからもこつちからも、御進物や賣買や、またお手製やらで、お砂のお團子がたくさん出來た。

と向から繪にある金太郎さんのやうに二重あごのニコ／＼した明さんが「四の級おは入り」と大きな聲でよびに來た。今まで使つて居た小さいバケツも、ふるびも、しやもじもなげ出して、バタ／＼とかけ出さうとするのを「よい子は使つたおもちやをかたづけるのでしたね」と先生の言葉のまゝに、すぐになほしに來た五郎さん、秀ちや

ん。やんちやんな成ちやん達はそんな子に見むきもしないでかけて行つたが、友達の彦ちやんに「君、あら／＼、悪いせ」と一目にらまれて、皆大急ぎで戻つて來て、せつせと片づけた。庭の草履をしまつて、上草履をはいて室に入て腰をかけるまでは可成の時を費した。オルガンの音でおじぎがすむと、こんどは「お名前呼び。」

上をうりをはく時に「なかやは／＼」と云つたたき子さんの目はもう涙で一ばいだつた。「なかやはね、たきちやんがお土産作しらへていらしやると來ますよ」と云はれて、やつとだまり先生の手にしつかりすがりついて室には入た。

「今日はたき子さん、先生がびつくりなさるやうな大きい、お聲でお返事ませうね」とそばについて腰がけた見習保母はかう云てはげました。たきちやんはだまつてがつてん／＼をした。氣の弱いはにかみやのたきちやんはどこかにまた負けぬ氣の處があつたから、小さい胸に生れてはじめて

位の決心をしたのでせう。

「紅林たき子さん」と呼ばれた時「ハイ」と大きい聲で返事をするかしないか傍に居た保母にきゅつとしがみついて顔をかくした。この時はりつめてゐたたきさんは急によはいたきちやんに返つたのだ。そして居ても立てもたまらぬほどきまりがわるかつたのだ。

「お上手でしたぬ」とだけ云つた先生の心には「お強いお子。よく云へた。よい子であつた」と抱きあげても小さい胸の努力をみとめて、むくひてやりたかつた。

紫の摺紙でこしらへたふとんを「とき色の菊の花でとめて頂戴」と云つたのもたきちやんらしい要求だつた。

おみやげがすんで皆遊戯室にあつまつて、歌をうたひ「さよなら」の御挨拶をして玄關に出た時、多せいのおむかひの中で、上り段に一番近くに「なかや」の居たのをみてたきちやんは元氣よく「先生、御機嫌よう」と云つた。

○お伽通信社

多年主として教育のお伽噺(論語お伽噺、格言お伽噺、御製お伽噺、お伽十二徳、教訓夜噺、修身文庫お伽一學年よりお伽六學年、バイブルお伽噺、讚美歌お伽噺等)の著作に従事し來りし藤川淡水氏は一つは幼稚園兒童に對し健實にして趣味に富めるお伽噺を與へ、一つは保母諸氏に向つてお伽話材を提供するの目的を以て、幼稚園向きのお伽噺創作に従事し、來る十一月一日より左記の條件を以て弘く之を諸園に提供する由なり。

一、發信數 一ヶ月新作お伽噺二十篇

一、發信日 一日。八日。十五日。二十三日。

(毎回五篇宛を一括して發信す)

一、通信料金 一ヶ月金七十錢(郵税共)

尙ほ同通信には毎月二回づゝ附録として竹貫佳水氏の「お話の仕方の研究」(ついき)を添附すべしと。

同通信希望の向は東京市外巢鴨村宮仲、お伽通信社藤川淡水氏宛に申込まるべしとなり。

雜 錄

○滿鐵保育事務打合せ

今夏倉橋惣三氏の渡滿を機會として九月一日より三日間、大連に於て南滿洲鐵道株式會社の保育事務打合せが開かれた。同會社の地方課教育主任岡本辰之助氏が議長席に就き、野村地方課長及び倉橋惣三氏等臨席、諸種の事項に就き研究討議があつた。その出席者及び研究事項は次の如くである。

保育事務打合せ出席者

瓦房店小學校長	平岡 數馬
大石橋小學校長	折口 愛之助
海城小學校長	佐藤 藤太郎
遼陽小學校長	千田 喜十郎
奉天小學校長	河村 音吉
鐵嶺小學校長	油井 文市郎

公主嶺小學校長	奧藤 文吉
本溪湖小學校長	齋木 任時
橋頭小學校長	赤崎 直彌
鷄冠山小學校長	谷口 勇
撫順小學校長	鈴木 重憲

北公園幼兒運動場保母	坂井 ふで
寺兒溝幼兒運動場保母	戸 籬 いと
沙河口幼兒運動場保母	國 廣 節
瓦房店幼兒運動場保母	和 田 小濱
大石橋幼兒運動場保母	齋 田 エイ
遼陽幼兒運動場保母	増 谷 千代
奉天幼兒運動場保母	中 川 ヒナ
鐵嶺幼兒運動場保母	泉 としえ
開原幼兒運動場保母	内 山 マキ
長春幼兒運動場保母	佐藤 むめい
鷄冠山幼兒運動場保母	野 中 千代
安東幼兒運動場保母助手	渡 邊 ふみ

撫順幼兒運動場保姆

古田 ミネ

公主嶺幼兒運動場保姆

奥藤 静子

研究事項ノ一

一、滿洲ニ於ケル幼兒運動場ノ特殊ナル目的の如何

二、建物及設備ノ運動場トノ關係及研究

三、運動場トシテノ衛生的設備ノ研究

四、滿洲ノ幼兒トシテ實際取扱ヒニ於ケル身體上

又精神上特殊ナル點アリヤ各運動ノ特色ヲ承ハ

リタシ

五、各期ニ於ケル室内遊戲及ビ身體ニ有効ナル方

法及手段

六、保育時間ト幼兒トノ關係ノ研究

七、運動場ト家庭トノ連絡方法及實際

八、保育項目ノ標準ヲ定ムルコト

九、身體ノ最調和的發達ヲ促スベキ方法及器具

十、多勢ヲ一組トシテ取扱フ場合ノ特殊ナル方法

手段

十一、特殊兒童ノ取扱ヒ方法及手段

1、盜癖ヲ有スル幼兒ノ矯正方法如何

2、破壊的性質ヲ有スルモノ

3、色盲ヲ矯正スル方法

4、男兒ニシテ女性的性質ヲ有スルモノ

十二、感覺練習ノ完全ナル方法及玩具

十三、學齡前ノ特別ナル取扱ヒ方法手段

十四、主任保姆ノ兼務ニ關スル件

十五、保姆助手採用ニ關スル件

十六、保姆ノ研究機關ヲ設クルコト

1、内地へ出張

2、沿線參觀

3、打合會

十七、幼兒ニ忠君愛國ノ念ヲ養フタメニ各運動場

ニ於テハ如何ニ取扱ヒ居ルカ

研究事項ノ二

一、幼兒運動場保姆一人ニ對スル幼兒數ノ最大限

度如何

二、屋内幼兒運動場ニ於ケル幼兒一人ニ對スル最

少限度ノ坪數如何

三、幼兒ノ運動具トシテ比較的效果大ナルモノ品種ヲ問フ

四、幼兒ニ間食セシムル可否

五、幼兒ニ午睡ヲナサシムル可否

六、幼兒運動場内ニ家庭的設備ヲナス可否又ハ程度

七、運動場ニ於テノ保育時間

八、間食トシ一回食事ヲナサシムル可否

九、幼兒運動場保育修了前ニ於ケル小學校入學前ノ豫備的訓練ヲナスノ可否

十、幼兒ノ男女性別ニヨリテ區別スベキ保育程度如何

十一、玩具ハ破壊シ易キモノト堅固ナルモノトハ何ヲ可トスルカ

十二、幼兒保育ニ最モ適切ナル玩具ノ種類

十三、幼兒ニ適當ナル服装帽子履物如何

十四、幼兒ニ幼年畫報其他ボンチ畫等ヲ見セシム

ル可否

十五、保姆トシテ特ニ修養スベキ學科目ハ如何

十六、花卉栽培及動物飼育ノ設備方法ハ如何

十七、幼兒ノ個性觀察ノ事項方法ハ如何

十八、滿洲ニ於ケル年中行事ノ調査及幼兒運動場

ニ於テ其時々ノ訓練法ヲ研究スル必要ナキカ

十九、滿洲ニ於ケル幼兒ノ社會的自然的現象ヲ研

究スルノ必要ナキカ、アリトセハ其事項方法ハ

如何

二十、最モ經濟的ニシテ且實行ニ易キ安全ナル効果多キ運動方法如何

○フレーベル會總會

本會總會は本月二十九日午後一時より東京女子高等師範學校附屬幼稚園に於て開催、倉橋惣三氏の「滿鮮幼兒教育視察談」及び澤村專太郎氏の「現代に於ける日本畫の潮流」なる講演ある筈。

會 告

○會費御拂ひ込みの節は名前は初め御入會の時の御名前へと御同一になし下され度く、假令ば初め幼稚園名にて御入會、後個人の御名前へにて會費御拂込み等のことなき様、必ず願上候。整理上甚だ煩雜致し候につき右特に御注意願候

○會費御未納は會計整理上甚だ困難致候に付確實に御納付下され度向後萬一御不納久しきに亘り候場合は乍遺憾雜誌發送を停止可致候間左様御含み置願候

○會員諸君にて御轉居等の節は至急御一報願上候

○萬一本誌不著等のこと有之候折は直に御一報煩し度候

顧問 高島平三郎先生

モドコ

日 本 一 の 繪 雜 誌

本誌の特色

- 最もまじめなこと
- 最も教育的なこと
- 最も平易なこと
- 繪の美しいこと
- 記事の面白いこと

本誌は最も着實にして教育的幾多畫雜誌中独自の地歩を占む。記事は全部片假名にて極めて平易。八九歳以下の子供の絶好伴侶なり。

發行所 東京市小石川區林町五十七

モドコ社
 電話 番東 町京 六二
 番番 八三 六九

定價一冊拾錢
 郵稅五厘
 六冊郵稅共五拾八錢
 十二冊郵稅共壹圓拾錢
 總て前金の事

の一本日 年幼本日

□倉橋惣三先生監修

本誌は、三歳から拾歳までの子供の爲め美しい繪と、面白い噺とを、教育的に組み合せた他に比類なき繪雜誌です。

本誌は、玩具とお噺しとの興味及び教育的價値を兼ねあはせたるもの、子供には何よりも喜ばれ、何よりもよき友達となります。

定價

壹冊拾錢 □半年 郵稅共六拾參錢
郵稅壹錢 □壹年同 壹圓貳拾錢

婦人畫報
少女畫報
日本幼年

發行所

東京橋鍛冶橋外
振替東京四九〇〇

東京社

羽仁とも子主幹

子供之友

本誌は十分教育的に編輯された子供雑誌で御座います。記事も挿畫も子供の喜ぶものばかりです。楽しんで讀む間に、頭腦をよくし感情を高尚にし、善良なる習慣を愛するやうになります。『子供之友』には、一つの非教育的なる挿畫も、一行の不注意なる文章もありません。『子供之友』は、家庭教育の最も有力なる補助機關であります。幼稚園及び小學校時代の御子様方のために、熱心によき讀物を求めて居らるる御家庭におすゝめ致します。

定價 十一半 分 稅 十 錢 六
冊 年 郵 錢 六
價 錢 六
東 京 東 振 替 一 六 〇 〇 番
社 友 之 人 婦
谷 川 司 雜 京 東 振 替 一 六 〇 〇 番

フレーベ

第一條 本會ハ幼兒保育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的ト

第二條 本會ハフレーベル會ト稱シ東京ニ置ク

第三條 會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒保

育ニ篤志ナルモノトス

第四條 會員ハ本會ノ經費トシテ一ヶ月金拾錢ヲ齎出スベシ

第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノ

ハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルベシ

第六條 本會ノ目的ヲ達センガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ

一、總會、毎年十月之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、保育參考品

幼兒成績物展覽、會務ノ報告等ヲナス

一、常會、毎年二月、六月、ノ第二土曜日之ヲ開キ保育ニ關スル演

說、談話、協議、實驗等ヲナス

尙毎年四月廿一日特ニフレーベル紀念ノ爲メ會ヲ開ク

一、組合會、會員中特ニ或ル事項ヲ研究セントスルモノヲ以テ組

織ス

但シ別ニ組合格約ヲ定メテ會長ノ承諾ヲ經ルモノトス

一、雜誌發行、毎月一回雜誌ヲ刊行シテ之ヲ會員ニ配布ス

一、前項ノ外本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件

本會會長

中川謙二郎

本會幹事

(イロハ順)

井村 くに 池田 トヨ
大瀧 晴 和田 實
倉橋 惣三 安井 哲
小向 きみ 雨森 劍
坂内 ミツ
和田 くら
福田 ふく
坂井 ふで

本會評議員 (イロハ順)

乙竹 岩造 吉田 熊次 田中 ふさ
野口 幽香 横山 榮次 藤井 利譽
下田 次郎 日田 權一

本會客員 (イロハ順)

伊澤 脩二 巖谷 季雄 岩谷 英太郎
波多野 貞之助 細川 潤次郎 本間 辰藏
戸野 周次郎 大瀬 甚太郎 奥 好 義
尾田 信忠 大久保 介壽 嘉納 治五郎
唐澤 光徳 谷 本 富 高島 平三郎
榑橋 源太郎 多田 房之輔 田中 敬一
中島 力造 中村 五六 野尻 精一
野上 俊夫 久留島 武彦 松本 亦太郎
松本 孝次郎 馬上 孝太郎 富士 川游
小西 信八 淺岡 一 笹部 顯宜
櫻井 光華 三島 通良 篠田 利英
東 基吉 瀬川 昌耆 尺 秀三郎
菅原 敬造

土方久元伯、股野琢、與倉喜平三閣下題字並序
 東京帝大教授中島力造、松本亦太郎兩文學博士序
 東京高師教授乙竹岩造、佐々木吉三郎兩先生序
 東京女子高等師範學校教授下田次郎先生序 平瀨龍吉著

萬民 兒童問題之將來 必讀

親として子を愛せない者はなく、子孫の出精と發展を望まない人はない。本書は斯る父母と幼稚園嫗母の爲に無垢の兒童を立派な人物に仕立てる途をば面白く流麗、玉の様な歌の體に書き流したもので何人も一度本書を繙く時は其面白さに酔されて巻を終ふるを忘るゝと云ふ一大快著たることは甲賀ふじ子先生を始め斯道大家たる乙竹岩造先生等が『本書は兒童問題の將來を面白く説いた本で、廣く一般家庭に詳讀諷唱せられましたら、到る所、偉大なる富豪金傑の氣魄精神を兒童の間に鼓吹することを得て、大和民族の發展と幸福進歩の爲に大なる益を與ふるものたるを保證して疑はない』との評語を見ても明かである。子女の賢明を望まると父母と兒童を愛する方々が之に依りて新しき教訓と大なる利益を受けられんことを望む。

正價金壹圓參拾錢送料拾錢

發行所 東京市小石川 幸運社 賣捌 東京麴町 フレーベル館
 區大原町十四 區三番町

振替東京參壹八八九番

振替東京一九六四〇番

明治三十四年一月廿八日第三種郵便物認可(毎月一回五日發行)

婦人と子 第十六卷第十

大正五年十月五日發行
 大正五年十月五日納本濟

印刷所

凸版印刷株式會社本所分工場